

NPO 法人 長崎史談会



長崎学レポート

令和元年度 テーマ「長崎の港」 第三回公開講座 令和元年7月20日・第四回公開講座 令和元年8月17日

第2号

令和2年1月1日発行

長崎学レポート

編集委員会

—
T 850-0861

第三回長崎学公開講座 第二部発表要旨

原田 博一

渡来後の隱元禪師

記述)は、崇禎六年(二六三〇年)(二六三七)万福寺の黄檗禪三代住職となつた。崇禎二七年(二六四四)住職を弟弟子の亘信行弥に譲ると、福嚴寺(浙江省嘉興市)、さらには龍泉寺(福建省長樂市)の住職を歴任、順治三年(二六四六)万福寺に再住した。

この当時、明朝は、崇禎帝の自殺によって滅亡、代わつて清朝が台頭、清朝の支配は福建省にも及んだ。しかし、鄭成功ら明朝の遺臣たちは、明朝の再興を目論み抗戦したので、福建省も各地が戦場と化した。

このようなか長崎では、興福寺の三代住職逸然性融を中心に、空席となつた崇福寺の三代住職の人選を急いでいた。当初、逸然らは、隱元の法嗣也懶性圭を招請し

也懶は、順治八年（一六五二）崇福寺の招請に応じ、隱元の許可を得ると、廈門を出航、長崎に向かつたが、途中、乗船が難破、溺死した。

ところが、同年、亘信の弟子道者超元が崇福寺の招請に応じ渡来、崇福寺の三代住職となつた。しかし、道者が崇福寺の住職になることは、多く檀信徒の希望するところではなかつた。

このようななか、隱元のもとに逸然らの招請状が届いたのである。隱元への逸然らの招請状は、承応元年（一六五二）の四月と八月、同二年（一六五三）の三月と一一月の都合四回出された。

その三回目の招請状を見た隱元は弟子の良者性瑠光を派遣、長崎の実情を調べさせた。

隱元の法嗣木庵性瑠も弟子の靈叟を派遣、同じく実情を調べさせた。この良者や靈叟の報告をもとに、四回目の招請状を受け取つた隱元は、ついに長崎に行くことを決心したのである。

承応三年（一六五四）五月一〇日、隱元は万福寺を出發した。その一行は、贊

林性機をはじめ二六人の弟子のほか、大工や仏師などの工匠も伴つたので、総勢は三〇人ばかり、まさに教団ぐるみの移動であった。六月三日廈門に到着、以後、しばらく廈門に滞在したが、東シナ海を支配していた鄭成功の許可を得ると、一二日廈門を出航、七月五日無事、長崎港に到着した。

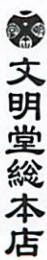
翌七月六日、隠元は興福寺（長崎市寺町）に入り、住職となつたが、明暦元年（二六五五）の五月には崇福寺の住職となり、八月まで在職した。

ところで、長崎に行くことを表明した隠元に対して、万福寺の壇信徒が挙て反対した。そこで、隠元は、三年時間をくれ、三年経つたら必ず帰つて来るように約束したという。

果たしてこれは隠元の本意であつたろうか、筆者はこの三年経つたら帰つて来るには大いに疑問を持っている。

隠元は、随行した二六人の弟子のうち、頼りとする慧林性機、独湛性瑩、独吼性獅、南源性派の四人以外は全て帰国させたが、明暦元年（二六五五）に

この会は個人会員と法人会員の皆様により運営されています



文明堂総本店



メモリード



浜屋



森谷商会



高野屋



ホテルニュー長崎



福砂屋



୧୩୯

は木庵に、同三年（一六五七）には即非如に渡来を命じている。これは、隠元が長崎に来てみて、日本に黄檗禪の拠点を築けると確信したからである。案の定、渡来早々、隠元を臨済宗妙心寺派の総本山妙心寺の住職に迎えようとする龍溪宗潜らの運動が持ち上がった。結局、この運動は失敗に終わったが、龍溪らは以降も幕府に対し隠元の遭遇について運動を継続していた。隠元は、明暦元年八月には摂津国高槻（大阪府高槻市）の妙心寺派の普門寺の住職となるため、長崎を離れた。これは、龍溪らの要請によるものであるが、以後、隠元は、長崎に戻ることはなかつた。

隠元の三年で帰るといふのは、あくまでも方便で、隠元の最初からの目的は日本に留まり、黄檗禪を全国に広めることだったのである。ところが、隠元の思惑に反し、幕府は、隠元の処遇についてその判断に迷い、なかなか結論を出せずにいた。

（現に、明暦三年の「覺」『長崎諸事覚書』内閣文庫蔵）にも、「隠元禪師來朝以後、唐僧切々渡海候、向後來り候は、陸地に揚げず、重ねて渡海無用の由申し聞かせ相い戻すべく候（略）」とある。

明暦三年の時点でも、幕府は、唐僧の渡来は一切認めないとことであつた。しかし、万治元年（一六五八）龍溪らの運動に理解を示した元大老酒井忠四代将軍家綱が隠元を謁見、家綱は隠元に日本永住を命じたのである。



開港六町のひとつ平戸町に開港後の長崎には、多くの住民移入があつた。ここで取り上げる平戸町はこうした新規の住民が集まって構成された町である。

特徴としてボルトガルが対日貿易の拠点として要塞化を試みた長い岬の先端を支えるために計画的につくられた経緯をもつ六町の一つであった。後に横瀬浦町を合併した。

史料『寛永十九年平戸町人別生所札』は、キリシタン禁教後、住民の出生地、住所異動の経歴、宗派親などについて記載した

に建立された。以後、同寺は、わが国の黄檗派（宗）の総本山となり、中国の黄檗山萬福寺（古黃檗）に対して新黄檗と呼ばれた。

長崎港と初期長崎の住民
— 寛永年間平戸町の人々 —

赤瀬 浩

開港六町のひとつ平戸町に開港後の長崎には、多くの住民移入があつた。ここで取り上げる平戸町はこうした新規の住民が集まって構成された町である。

戸町の人口は、男一〇六人、女二九人計二三五人。平均年齢は男三〇歳、女三三歳。バランスのとれた構成で、都市の開発期を過ぎ、禁教の徹底やそのための対外政策が一段落した時代であった。

平戸町の住民間には、キリシタンからの転宗者（転び）と一度も洗礼を受けた経験のない仏教徒との共存がみられる。転宗者は二二人、平均年齢四〇歳。仏教徒は一〇四人、同二歳。年齢層の違いがあつた。

転宗者の最高齢は、うちは（九五）、最年少は猪の介と権三郎（二六）。一五歳以下に転宗者はいない。

